

## 亡命者の戦後

—— クラウス・マンの試練 ——

林 敬

Die Nachkriegszeit eines Emigranten

— Die Heimsuchung Klaus Manns —

Kei Hayashi

Received October 21, 1992

### はじめに

周知のように、第二次世界大戦後のドイツに対する裁判では、通常の戦争犯罪に対する裁きにとどまらず、新たな概念の導入のもとに、「人道に対する罪」までも裁かれた。また、次々と明るみに出た惨状に直面して、政治的にも道義的にもドイツ人の「共同の罪」が問われた。しかし、ニュルンベルク裁判自体は勝者が敗者を裁くという枠組みを越えることはできず、占領体制のもとで民衆自身は、自分たちや指導者たちの罪責を問うことよりも、さしあたり今日生きていくことが問題であった。<sup>①</sup>「人道に対する罪」はお偉方の裁判という認識以上には出なかったし、「共同の罪」や「集団責任」問題も、他の旧枢軸国同様深く問われないまま、それどころかむしろ真に罪責を負わねばならない個人を政治的に免責する道具にさえ使われるなど、その後の東西冷戦の中に埋没した。近年の「歴史家論争」や「ハイデガー批判」は、戦争の責任が十分に問われなかったことに対するいらだちないしは危機感を示している。1989年の「壁」崩壊後の諸問題もこれらの経過と重なってくるように思われる。

私の興味は二つある。戦後の出発点での戦争責任の問われ方と、亡命者たちの運命である。自らの罪責をドイツ人はどのように受けとめたのか、また、亡命文学のバックボーンであった反ナチス・ヒューマニズムが戦後文学の中でどのように受け継がれていったのか。一般にナチス時代の「もう一つのドイツ」は戦後社会の中でどのように受け入れられたかは、まさに戦後社会の有り様と亡命者たちの戦後の運命に関係する。クラウス・マンはその意味で典型的に亡命者の運命を生きた。以下、はじめに亡命者を迎える祖国の状況を知るてがかりとして、亡命者とそれに対する国内の人たちの心理がよく現れている「国内亡命論争」を、次いで、色々な

---

\* 教養部

Faculty of General Education

意味で戦後の重要なテーマであった「罪責」と「非ナチス化」について見ていきたい。何よりもドイツの歴史的犯罪に対する責任意識と非ナチス化の実態が、国外亡命者の社会的立場と密接に関係したからである。最後に、クラウス・マンの思想とその戦後社会での帰趨を検討しながら、戦後ドイツの一つの局面について考察したい。

## 1. 「国内亡命」論争

国内と国外の亡命をめぐる論争は、ナチス時代もドイツにとどまっていたヴァルター・フォン・モーロのトーマス・マン宛公開書簡をきっかけに戦わされた。1945年の終戦直後間もない頃のことである。この書簡に対するTh.マンの返書に現れた彼の態度が、同じくドイツ国内にいたフランク・ティースを刺激した。彼らの論争は一冊の小冊子になった。タイトルは『亡命と「国内亡命」』である。彼ら二人の名は今ではほとんど聞かれることはなくなったが、彼らの主張はドイツ人の複雑な心理を代表していた。

モーロの書簡はTh.マンの祖国に対する誠実さに訴えて彼の帰国を要請している。そこには国内にとどまらざるをえなかった者たちの苦悩を見て欲しい、蹂躪された心に（人間性や人類に対する）心からの信仰を取戻してやって欲しい、という願いがあった。しかし同時に、ドイツ国家という「巨大な収容所」の人間に対する弁護もあった。ドイツ国民は最奥の核心においては罪業や残虐行為と関わりがなかったのだという訴えであった。

ティースはこの議論をさらに進める。彼は「国内亡命」という用語を1933年に彼が初めて使用したときのことから始めて、ナチスに対する抵抗は国外にいた者だけの専売特許ではないこと、経済的なことやあとに残る家族に対する危害などの危惧から国外脱出は誰にもできることではないこと、<sup>②</sup> しかし、国内にあってはナチスによって決して内面まで支配されたわけではなかったこと、むしろ、苦しいときを乗り切ることによって「国外の敷席」からドイツの悲劇を見物しているよりも人間的に豊かになりえること、などを主張した。そして、彼もまたTh.マンに対し、安全な場所からでなく苦悩する国民の真ん中で仕事をしてくれるように帰国を要請している。しかし、ここには亡命者に対する批判や皮肉と共に「国内亡命」の国外亡命に対する正統性の主張もあった。

モーロに対するTh.マンの返書は彼の期待に添うものではなかった。それどころか国内にとどまっていた者に対する批判であった。彼は帰国しない理由として、表向きは国籍上もうアメリカ人であること、12年の漂泊でドイツが生活的にも遠くなったことをあげているが、その実、いったんはヒトラーを支持した者たちの沈黙の心を今更容認しがたい、この12年間で存在しなかったような素朴さは耐えがたい、との気持ちを隠すことができなかった。あの時、決定的な時、「連帯」が失われたのだ、それにもまして墮落や犯罪を粉飾するところでは文化の創造はありえないと厳しく批判した。

このあとの論争はティースとTh.マンの間で展開されるが、それはドイツのために失われた連帯を構築するよりも、まさにティースの論評の「トーマス・マンからの決別」というタイトルに現われているように、断絶を拡大するものでしかなかった。ティースの主張には、確かに「数百万人にも及ぶ東からの難民の例のない苦難」への喚起など、その限りでは正当な主張もあった。しかし、「我々に希望を与えてくれるのは、ドイツとヨーロッパの苦悩から芽生えた

ものであって、『世界市民』のものではない。』<sup>③</sup> といった発言は、論争の相手だけでなく、クラウス・マンのようにドイツを追われて、自らを「世界市民」として規定しながら他国で生きていかざるをえなかった亡命者には、とうてい受け入れられる内容ではなかった。

Th.マンとティースの論争に対しては当然反響が予想される場所であるが、当時アーノルド・バウアーは、問題はドイツのクラシック文学の総体（ドイツ精神）が追放され、誤解されたことであって、どこで耐えていたかということではない、国内であれ、国外であれ、ドイツ精神がどのように主張されたかが肝心だと批判した。彼はTh.マンやその他の亡命者たちを「根なし草」と呼ぶようなヒステリックな攻撃は、政治的反動の最初の兆候とみなしている。<sup>④</sup> 「国内亡命」の主張の背後に、排他的正統性の認知要求を見てとったのである。

アレクサンダー・アブシュもそのような要求を感じた。彼はモーロやティースのナチス時代におけるいかがわしさを指摘して、そのような背景が亡命をめぐる論争に間違ったアクセントを与えたのだと説明している。<sup>⑤</sup> しかし、彼はモーロやティースと違った国内亡命者たちの存在にも注目している。それは世間から離れた内面性に逃避した人たちではなく、ゲシュタポや爆撃の恐怖と闘った人たち、抵抗し、収容所に囚われた人たちである。彼がより本質的なものとして理解し期待したのはそのような意味の国内亡命と国外亡命の「内的出会い」であった。彼が確信するところによれば、ドイツの苦悩にドイツの現場で耐えてきた精神と、世界文化の中でドイツを代表してきた精神の合流から、ドイツの文学は再生するのである。

アブシュの場合、彼は国内亡命を三様に区別している。モーロのように最初ヒトラーに共鳴し、後に沈黙した人たち、リルケを先祖とする世間から逃避した内面性の詩人たち、そして第三帝国の地下抵抗者たちである。ティースとTh.マンの論争における「国内亡命」がこの内のどれを想定しているのか、概念規定は明確ではなかった。明確でないままに論争の過程で「内的亡命」の評判が落ちてしまった。<sup>⑥</sup> また、アブシュが期待した合流が具体的に何を意味したかは定かではないが、結局のところTh.マンの帰国は実現しなかった。

『ドイツ文学の社会史』によれば、未曾有の敗戦を体験したドイツの戦後におけるキーワードは「文化」であった。その核心に「精神的な新生」があった。——その指針を求めて、例えばフリードリヒ・マイネッケはゲーテ、シラーへの回帰を提唱した。彼らの普遍的人間の理想にドイツ精神のめざすべき方向、世界精神の典型を見たのである（『ドイツの悲劇』）。——しかし、ここには落とし穴もあった。一種の精神主義が提唱される限りで、いわば内面の聖域が復活する。これは文学の自立性の神話と結びついて、ティースのような「国内亡命」の排他的弁明に用いられた。<sup>⑦</sup> このようにして、戦後のドイツと第三帝国の連続性と非連続性が十分に意識されないまま、混乱した文学界の中で、「零の地点」で、むしろ保守的伝統が復権したのである。

一方、ドイツの苦難の直視に対する要請は、確かに看過できない面をもっている。それはTh.マンのような亡命の「大家」に欠けていた面であった。確かに彼は新天地に根をおろして、彼が理解するゲーテ的意味におけるドイツ精神の世界化、世界の中に散らばってドイツのもつ「良きもの」を世界と共有する道を歩んでいたかもしれない。<sup>⑧</sup> しかし、自ら責任なしとは言えないにしても、歴史の大きなうねりの中で翻弄された無名のドイツ人たちの苦悩は、亡命知識人の想像を絶するところであっただろう。戦場でドイツのためにとり返しのつかない犠牲を払いながら、戦後社会に自らの帰る場所を見出すことのできなかった若者たち、まさにそのよ

うな世代を代表するヴォルフガング・ボルヒェルトが『戸口の外で』で描いた帰還兵のドイツと、Th.マンのドイツ——「もって回った語り口で語られる19世紀的教養主義」——は何の関係もないと指摘されている。<sup>(9)</sup> ドイツ難民を含む現実のドイツ人の苦悩、それ以上にドイツ人が与えた諸民族の苦難は、確かに国外では直接体験することはできない。

亡命論争は本来実り多い要素を含みながら、真実の議論が不在のまま、ドイツにおける正統性争いの色彩を濃くしていき、相互理解や連帯の方向には向かわなかった。結局、亡命作家の亡命中の作品はほとんど受け入れられず、<sup>(10)</sup>彼らの立場は「二度の亡命」とさえ言われたのである。

## 2. 罪責論と非ナチス化

### 〔罪責論〕

罪責に関して画期的なものとして問題になったのは、ドイツの、あるいはドイツ人全体の罪と個人の罪の関係である。ニュルンベルクの「国際軍事法廷」は戦争犯罪を集団の犯罪と個人の犯罪に区別し、集団の犯罪の場合は、直接手を下していなくても、構成員は罪を免かれないものとした。しかし裁かれるべきことは通常の戦争犯罪ではなく、「人道に対する罪」であった。この時、個々のドイツ人はドイツの罪に対してどのような関係に立つのか。ニュルンベルク裁判に対するドイツ人の反応はさまざまであった。爆撃による破壊、飢え、占領軍に対する恐怖、おまけに東部から追放されてくる何百万という難民を受け入れなければならない。こうした中で、多くのドイツ人にとってこの裁判は他人事であった。「昨日の指導者は、彼らの運命を堪え忍べばよい。彼らは十分それに値する。それよりも切実な問題は明日何か食うものがあるかということだ」<sup>(11)</sup> というわけである。一方、未曾有の犯罪が明らかにされた時、その後二度とないほどに真剣に、徹底的に「良心の究明」が、罪と責任が問われたことも事実であった。<sup>(12)</sup> 体制の中で犯された個人の犯罪が、あの「人道上の罪」として問われた事柄そのものが、ドイツ人全体の罪として受けとめられ、それ故に、それに対する個人の内面の関わりが問題にされたのである。しかし、亡命者との関連で見ると、このような究明も亡命者たちに対しては和解的に働かなかった。戦後すぐに現われた多くのドイツに関する考察の中で、カール・ヤスパースの『責罪論』(1946年)はその真摯な態度が高く評価されているが、そこでも亡命者に対する一定の距離が見られるのである。

ヤスパースは罪責をまず集団の罪と個人の罪に分類し、個人の罪をさらに4つのカテゴリー(刑法上の罪、政治上の罪、道徳上の罪、形而上の罪)に分け、これを外から罪を問われるものと、自己の内面から問うものとに分けた。彼はこのカテゴリーに従ってドイツ人の罪を綿密に精査し、すべてのドイツ人の有罪を論証した。すべてのドイツ人の道義的責任を問うこの論証は極めて誠実なもので、異論の余地はまったくありえない。しかし、このような問い方は誠実であればあるほど誰にでもできることではなく、従って逆説的な効果を可能にする。つまり、たまたま罪科の範囲が客観的に定められることによって、直接残虐行為に関わることがなかったゆえにそのような行為を知らなかったとする大多数のドイツ人は、「自己の良心の法廷」の前だけに立つことになる。問題はこの法廷がどのようなものであるかである。それがどのようなものかは知る由もないが、次のような事実は指摘できるだろう。一つは言うまでもなく直接

犯罪を犯した人間がいたことである。このことは、深刻な犠牲を払わなければならなかった人々にとって、自分も犠牲者であるとする無実の犠牲者との同一化の契機となった。命令で仕方がなかったと自己弁護する者は論外としても、多くの人々にとっても「悪の外部化」が行なわれたのである。<sup>(13)</sup> この問題と関連してラルフ・ジョルダーノは『第二の罪あるいはドイツ人であることの重荷』(1989年)の中で「ドイツ難民憲章」(1950年8月)を取り上げている。この憲章では、数百万人に及ぶ難民の困難な立場と、それにもかかわらず、いわば恩讐を越えてヨーロッパの共同体再建に関与したいという意志が表明されている。しかし、ジョルダーノは憲章の起草者たちはドイツ占領下の東ヨーロッパで大量追放があったこと、つまりもともとドイツ人が東ヨーロッパを奪ったことに口を噤んでいると批判している。自らを犠牲者と規定することによって、自らの責任を排除し否定した。それゆえに、「ナチスの犠牲者の世界とは何ら精神的繋がりが無い」と断定している。<sup>(14)</sup>

第二の事実は亡命者の存在に関係するものである。「国内亡命者」の反応については先に見たが、1967年に『喪われた悲哀』というドイツ的心性に対する厳しい批判の書を著した精神分析学者ミッチャーリヒ夫妻は、亡命体験のあるウィリー・ブランツの選挙戦を例に、戦後20年たった時点でも亡命がまだ非難されるべき対象であったことを指摘している。「臆測してよいものならば、彼は、より少ししか罪責がないということへの嫉妬を呼び起こした。つまり、彼はいわゆる不可避的といわれている兵役義務とか独裁者の強制などというものに対し、二者択一の余地が存在していたことを示している。だが、この二者択一は即座に過小評価された――亡命は臆病であったとか、逃亡は罪をまぬがれ得ない、等々と。」<sup>(15)</sup> ここでは、亡命しなかった人たちの心理構造が鋭く見抜かれている。強制された者たちにとっても、沈黙していた者たちにとっても、亡命者はまさに別な可能性の証人であったのである。Th.マンは戦後すぐに「良きドイツ」と「悪しきドイツ」があるわけではなく、共に同じくドイツであることを説いた。悪しきドイツ、それは道を誤った良きドイツであること、従って、罪を負った悪しきドイツを否認することはドイツに精神の生れ故郷をもつ人間にとってはまったく不可能であると述べた。<sup>(16)</sup> ヤスパースも同様の主旨のことを明言している。いやしくもドイツ人に源を発する出来事に対して、自分もドイツ的な知的・心理的生活に属する人間であるがゆえに、具体的にこれという罪はないが、罪の分担とでもいったようなものが生じてくる、というのである。これは二重の意味の罪で、一つは同時代の罪であり、一つは伝統の罪である。彼はまったくTh.マンと同じように「ドイツ人の生活の精神的な条件のうちにこのような政權を生ずべき可能性が備わっていたということに対して、われわれは皆、罪の分担を担っている」と洞察する。<sup>(17)</sup> しかし、ヤスパースは「何故、抵抗しなかったのか」という亡命者の批判に答えて、収容所で殺された何十万<sup>(18)</sup>という国内の抵抗者を引き合いに出しながら、逆に亡命者の批判を偽善的なものと批判している。「弾劾を耳にするわれわれは、危険のさなかから逃れ出はしたものの、政治犯収容所の中での苦悩や死、あるいはドイツにおける不安と較べれば、亡命の苦悩はあるにしても、テロの弾圧をこうむることもなく外国で暮らしてきた人たちが、今になって亡命そのものを手柄のように語る口吻には偽善的なものを感じず」、こういった口吻に対してはこれを拒否する権利がある、と。<sup>(19)</sup> 確かに、国内の収容所で虐殺された抵抗者は英雄的で悲惨であった。それは誰も否定できない。悲惨という点からすれば、スターリングラードの何十万というドイツ将兵の死も、少なくとも生き残った亡命者の辛苦よりもはるかに悲惨であったかも

しれない。しかし、彼らの存在はここでは一種の防御装置として機能させられているようにも見える。一方における直接的な罪の回避、他方における防御の姿勢。対亡命者との関係で見ると、ヤスパースの『責罪論』の根底にも、ミッチャーリヒ夫妻やジョルダノが指摘したこのような心理的バランスに向かう傾向が見られることは否定できない。このバランス感覚は一般的に見られた現象であり、それ故ナチスと闘い、それからの母国の解放を願って苦難に耐えた亡命者は、皮肉にも故郷の人々にとって歓迎されざる存在だったのである。

ついでながら、ソ連側では国際情勢により何回か変更があった後<sup>(20)</sup>、現実には主として賠償の観点から「集団の責任」が問われた。

### 〔非ナチス化〕

ドイツの戦争責任、占領地における残虐行為や「人道に対する犯罪」に責任ある者の処罰はニュルンベルクの「国際軍事法廷」でなされたが、戦後行政からの除去はいわゆる「非ナチス化」政策によって実行された。しかし、責任はいったいどの範囲まで及ぶのか？ 当初それは占領軍によって実行されたが、責任の範囲は占領4カ国の政策によりまちまちであった。西側3カ国の占領地区では「ナチズムと軍国主義から解放するための法律」（1946年3月）に従って全住民を対象にアンケート調査が行なわれた。それにより全住民は「重罪者、活動家、軽罪者、同調者、無罪者」の5カテゴリーに分けられ、容疑者は「非ナチス化裁判所」に送られることになった。しかし、膨大な数の審理を占領軍だけで行なえるわけがなく、後にドイツ人の裁判官が採用されたが、当然のことながら裁判官自身を含めて、ナチスと誰がどのような関わりをもっていたかを定める基準は一樣には決めえない。いずれにしても審理によって「非ナチス証明書」さえ勝ちとればすべてが免責になることから、その証明書は「洗剤証明書」といわれたという。<sup>(21)</sup>それゆえ、それは新たな社会的不正や混乱をもたらしたにすぎなかった。ゴロ・マンは「“非ナチス化”は実行不可能だった。その理由は国民のほぼ半分が他のほぼ半分を裁判すること、特殊技能をもつものの過半数を彼らの活動分野から追放することはとうてい望めなかったからである」と述べている。

ソ連占領地区では「非ナチス化」はコμμニスト・グループ（多くはソ連に亡命し、そこで訓練を受けた者たち）を政権につけるために、同時に他の政治勢力を排除するために利用された。それ故、非ナチス化はきわめて徹底していたが、審理は正確さと公平さを欠いた。ソ連の秘密警察が抑留収容所を撤収したのは1950年であったが、そこで殺されたのは事実無根で密告された人々を含めて7万人と推定されている。<sup>(22)</sup>（ニュルンベルク国際軍事裁判およびニュルンベルク継続裁判では合計36人の死刑判決が宣告されたにすぎなかった。その後のドイツ人によるナチス犯罪裁判で有罪とされた者も6469名。）ソ連地区での被疑者の家族から、正義を訴える多くの手紙がTh.マンにも届けられている。彼はそのことで1951年に当時東ドイツの最高指導者だったヴァルター・ウルブリヒトに書簡を送り、コμμニズムが内包するヒューマニズムに対する期待を表明すると共に、暴力的体質の払拭と十分証明できないナチス時代の犯罪に対して恩赦を要望した。<sup>(23)</sup>この事実はソ連の秘密警察が撤収した後も、不正確な抑留が続いていたことを示している。もっとも、ナチス弾劾の徹底という点では、抗戦で最大の犠牲を払ったのが2千万人の死者をだしたソ連国民であり、抵抗ドイツ人ではコμμニストであったことが大きな理由にあげられうる。

「非ナチス化」が西側で強力に推進されなかった理由は内在的なものばかりではなかった。すでに始まっていた東西冷戦がそれ以上に「非ナチス化」を不徹底なものにした。冷戦下ではナチスはもはや現実の敵ではなくなったし、それどころか新たな脅威に対抗するために、接点にあるドイツでむしろ旧勢力の協力が必要になったのである。東西両大国の世界的な軍事ブロック化によって道徳的、間接的加害者だけでなく、戦争犯罪人までも社会復帰した。

戦後、戦禍の傷跡の生々しい時期に現れた、ドイツに関しての二つの代表的な省察、Th.マンとマイネッケのドイツ論、『ドイツとドイツ人』(1945年)と『ドイツの悲劇』(1946年)では、奇しくもドイツが将来歩むべき道として「社会的ヒューマニズム」が示されている。(マイネッケはこの用語を用いていないが、「社会的な考え方と人間的な考え方をするとはわれわれにとって同一である」<sup>(24)</sup>と述べている。) Th.マンの場合、「社会的ヒューマニズム」の理念は第一次世界大戦後の省察から、1930年代はじめには「ヘルダーリンとマルクスの出会い」というシンボルで語られていた。それゆえ彼は第二次大戦後も同じ理念を説いたことになるが、しかし東西両ドイツともそれが現実の指針となりうる状況にはなかった。反ナチスによって結ばれた人文主義的西欧と社会主義陣営の同盟関係は、理念的な発展を見ないまま新たな敵対関係に入ったからである。一部コミニズム派の亡命文学者にとっては確かにソ連占領地区で要職が用意されたが、ヒューマニズムを内面の拠り所とした亡命文学者にとっては、ナチスの退場にもかかわらず、国内事情からも国際的状況からも、帰るべき故郷が失われたのである。

### 3. クラウス・マンの試練

クラウス・マンの亡命者の物語り『火山』の冒頭の部分はパリの亡命者の不安な会話から始まる。そして彼らの不安とは無関係にドイツ人を非難する異郷の眼。やがて彼らは決して安住の地を見出だすことなく世界の各地を転々として行く。しかし、彼らを追い立てたナチスの崩壊は彼らにとって苦しみからの解放とは言えなかった。彼らの戦後はどんな風だったのか、亡命者の反ナチス抵抗はどんな結末を迎えたのか。K.マンの亡命から戦後にかけては亡命者の典型的な軌跡を描いていた。そして彼が辿った内面の履歴は、ドイツの文化的、人文主義的精神の戦後ドイツにおける一つの悲劇的結末を示している。

K.マンの戦後について見る前に、戦争中の彼の考えと行動を概観しておきたい。ナチスがドイツを越えて勢力を拡張、さらに不安定な国際関係の中で、ソ連も自らの利益を計って、独ソ不可侵条約が締結された時(1939年8月)、それはソ連の粛清で動揺していた亡命者たちを根底から混乱させた。モスクワの亡命者は理由を探さなければならなかったし、以前から不安定だった社共を軸にした人民戦線運動は完全に破綻した。フランスではコミニスト系の亡命者が逮捕された。亡命者たちの間にも深い亀裂が生じた。K.マンは当時アメリカを拠点として亡命者の救援活動に力を入れながら、亡命者間の対立の調停に心を砕いていた。活動のかたわら、彼はイギリス、フランスとモスクワの協調関係が必ずしも良好でなかったことから、独ソ不可侵条約締結のうわさをありうることと予想していた。しかし、それは不安な予想であった。というのはそれは戦争に向って事態を一步進めることだからである。

ドイツとイギリス、フランスの開戦後も、亡命者間で共闘体制は再生できなかった。一方にナチスとスターリン主義の類似性(全体主義、独裁性)を強調する者あり、他方にイギリスも

ナチスも同じ（帝国主義）との見方があった。K.マン自身はヨーロッパの戦争を「帝国主義的資本主義的陰謀」と規定することに反対だった。彼はナチスが独ソ不可侵条約を侵犯しないとは到底信じられなかったもので、ソ連の対独不参戦が不満だった。

現実の戦争が始まって、彼には武力の問題が改めて切実な問題になった。目的は手段を神聖にするか——つまり、平和主義は絶対的無条件なものか、それとも力の行使は悪の攻撃に対する戦いにおいてはやむを得ないものか？（この問題はこの頃の評論、『トーマス・マサリク論』の重要なテーマになっている。）しかし、ドイツのとめどない進撃を前に、彼はチャーチルやドゴールの闘争に希望を抱かざるをえなかった。彼の身辺でも、弟のゴロ・マンは義勇兵としてフランス軍に志願した。そしてすぐに拘禁されて行方不明になってしまった。フランスからは助けを求める声と、自殺の知らせが頻々と聞こえてきた。そして彼は「戦争よりもっと悪いものがある」という結論に辿りつく。「誤解された平和主義」、それこそが戦争を助長したのではないだろうか、と思われたのである。ただ、この戦争で、本当に道徳的なことが問題になっているのか、という疑問は否定できなかった。<sup>(25)</sup>

1941年12月、アメリカ合衆国が日本、ドイツ、イタリア三国と開戦すると、K.マンはすぐに入隊を志願した。彼はすでに、自分はもう亡命者ではない、行末はアメリカ国籍の世界市民になると心に決めていた。「昔の故郷を、おまえはもう見出だすことはあるまい。新しい故郷もおまえには与えられない定めなのだ。世界がおまえの故郷だ。」<sup>(26)</sup> 幸いフランクリン・ルーズベルトのアメリカは彼にとって多くの可能性を期待できる国だった。そして、ヒトラーのドイツとアメリカの戦争に際して、罪のない子供たちの苦しみを思いながら、自分が非良心的になっていくことに不安を感じながら、それでもヒトラー打倒のためにドイツの街の爆撃に賛成した。アメリカ市民として自分も共に直接闘う決心をしたのである。薬物中毒によるトラブルがあったが、1942年12月入隊。基礎訓練を経たのち、正式にアメリカ国籍を取得し、1944年3月からイタリア戦線で心理戦担当の宣伝部隊の軍務（前線の拡声器でドイツ兵に降伏を勧告する宣伝放送）についた。

やがて戦争が終息に向かうにつれ、戦後世界が予感されるようになってくる。しかし、それは決して望ましいものではなかった。イタリアで失意の亡命作家に会った時、K.マンには亡命中は故国イタリアに郷愁を感じていた昔の知人が、今では亡命を懐かしがっていたように見えた。帰郷したこの作家の作品は、イタリア以外の国ではイタリアの特質を純粋に備えているとみなされているのに、当のイタリアではほとんど理解されなかったのである。イタリア人によれば、彼はもうよその人間になってしまったのだという。K.マンはこの時すでに「亡命は苦しいが、帰国はもっと苦しい」と書いている。<sup>(27)</sup>

ナチスドイツが最後の瞬間を迎える頃、K.マンは軍の新聞の特派員として12年ぶりにミュンヘンを訪れた際に、マン家の昔の家に行ってみた。純粋のアーリア種を生産するというナチスのいかがわしい任務に奉仕したその家は、内部がほとんど壊れていた。わずかに残っているところには若い女が一人住んでいて、追い出されることをひどく警戒していた。自伝的作品『転回点』の中の、象徴的な自宅再訪を伝えたTh.マン宛1945年5月16日付けの手紙は、他にダッハウ刑務所でのゲーリングへのインタビューと音楽家ヨハン・シュトラウス家訪問のエピソードを伝えている。ゲーリングは強制収容所で何が行なわれていたかまったく知らなかったという。一方、シュトラウスはナチスの庇護のもとに恵まれた活動をしていたことに何の後ろめた



さもなかった。どんな政権であろうと、彼には自分に相応しい待遇さえあれば他のことは、ガス室さえもどうでもよかった。K.マンはどんな事態になろうとこのての人間は「これまで通りやっていく」のだと慨嘆している。

解放されたヨーロッパでK.マンは脱出できなかった古い知人たちの悲惨な運命を次々と見聞した。一方で「何も知らなかった」、「最初から反対だった」というドイツ人の合唱を耳にした。どこへ行っても「国内亡命者」ばかりが目立った。これらのことは何よりもモラルの荒廃に思えた。彼にはそれが街の荒廃よりも痛ましかった。同時に、始まりつつあった東西対決の中で、ドイツの復興の意味とドイツの役割を道徳的、精神的領域に見出だそうとした。対決を自らの立場の復権に利用するのではなく、それをモラルの面から調停すること、そこからのみ世界の平和と合致した敗戦国の利益を引き出すことができると考えたのである。とはいえ、敗戦直後のドイツを直接見聞して、K.マンはドイツに対する失望と共に、亡命者の困難な立場を痛感した。東西分極化の中で、普遍性を求めた世界市民は、それこそがドイツの本来の道に適っていると思われたのに、またしても時代から排除されそうになっていた。それでも、困難な立場の中にこそ、亡命者の使命があったのである。それゆえ、彼の戦後の課題はナチスの過去を克服するために過去を再理解することと、道徳的、文化的ドイツの再興のために献身することであった。<sup>(28)</sup> 具体的にはナチスから解放されたドイツに文学的な面で影響を与えたいと願った。しかし、ドイツはたまに訪問するだけだった。除隊（1945年9月）後死ぬまでの数年間（1949年5月死亡）はローマ、アムステルダム、パリ、ニューヨーク、カリフォルニアを転々として定住することはなかった。

彼の戦後の主な仕事は、ドラマ『七番目の天使』（1945/46年）、『転回点』のドイツ語への翻訳（1947年）、『ドイツの声』の編集（1949年）である。他に数編の評論と未完のままになった小説『最後の日』がある。しかし、多くの仕事がうまく行かなかった。『七番目の天使』は未だに上演されていないという。よく言われているように、ナチスの唯一の文化的遺産は「真空」であったので、彼はそれを亡命者の文学で埋めたかったのであるが、<sup>(29)</sup>『ドイツの声』も結局出版されなかった。亡命中の作品『メフィスト』も出版の話が壊れてしまったが、この事件は亡命者の立場を端的に表している。というのは、『メフィスト』の主人公のモデルはナチス時代にナチスの庇護によって出世し、敗戦とともにいったんは鳴りをひそめたものの、戦後の状況の中で再び復活するという、これまた数奇な運命を辿った実在の俳優であったが、その名声におもねて、出版社がそれを風刺する作品の出版を断ってきたのである。

ここでK.マンが「国内亡命」についてどう考えていたかを見てみたい。これまでの記述から予想されるとおり、彼は所謂「国内亡命」を評価していない。彼は著述家の使命を確定し、それを基準に判断した。それによれば、「著述家は声である」、彼の口を通して国民が語るのである。「国内亡命」派はたいていの場合沈黙していたか、せいぜいが時局から離れた中立的なテーマを選択して、抑圧された人々の苦しみや希望を表現したにすぎなかった。それゆえ、「抵抗文学」という名に値する集合的な運動は、第三帝国には地下においても存在しなかったと指摘している。そしてナチスに逮捕され、殺されたカール・フォン・オシエツキーと先述のF・ティースたちを区別している。<sup>(30)</sup> 注目されるのはK.マンの場合でもナチス体制の犠牲者たちは殉教者として引き合いに出されていることである。もの言わぬこれらの殉教者たちはナチス崩壊後の正統性の指導権争いをどのように思っただろうかと偲ばれるが、いずれにしても正

統性の相互主張は何の实りもたらさなかったし、亡命者たちの作品のアンソロジーは出版されなかったのである。「ドイツの精神、ドイツの良心は沈黙しなかった。我々は道義的抵抗の文学をもっている。」<sup>(31)</sup> という主張は虚しくこだまするにとどまった。

憧れの帰還はナチス崩壊後も儚い夢でしかなかった。戦後の亡命者にとって、今や新たな試練が始まった。というのは戦争が終わった時、外国での亡命者に対する関心も終わった。言葉でもって仕事をしようとする人間には以前とは違った意味で困難な「言語亡命」が始まったのである。彼らにとって問題は単に言葉の問題だけでなく、いったい誰のために書くのかということが改めて切実な問題となった。ソ連への亡命者は東ドイツに戻って新たな社会の建設のためにそれぞれの道を歩んだ。それはそれでさまざまな問題をはらんでいた。(それは東ドイツ国家の崩壊と共に一気に表面化した。) その他のドイツへ帰れない亡命者たちにとっては、自分が亡命している国に溶け込んで、そこの人々と共通の問題意識をもってその国の言語で書くか、「世界市民」として世界にとって普遍性のあるテーマで創作活動をするか、その場合いったい誰が読んでくれるのかなど、いずれにしてもどこにアイデンティティーを求めるかは難しい問題である。K.マンの場合は反ナチスの延長線上で、ヒューマンイズムの問題、人間のモラルの問題、東西の無意味な対立の止揚が新たな局面でのテーマとなった。対立によって没落するか否か、即ち彼にとっての対立の図式は、東と西の対決ではなく、野蛮か文明かというものであった。『七番目の天使』は核兵器に対する警告が背後にあったし、『最後の日』では二人の理想主義者によってソ連およびアメリカの両体制の非人間性が告発されるはずであった。社会主義ヒューマンイズムの誇張された宣伝。しかし、政治局の監視下で生活し、仕事することがどのような現実であるのか。また、経済と軍事の権力者たちによって自由がどのように奪われているか。ソ連側の主人公はソ連兵に狙撃されて、アメリカ側の主人公は自殺によって、命を落とす結末であったという。<sup>(32)</sup>

1948年5月、K.マンはたまたまチェコ旅行中にジャン・マサリク（チェコ国家の創設者トーマス・マサリクの息子で無党派の外相）の自殺の報に接した。自殺の原因をめぐって、当時のチェコ国内の両陣営がお互いに非難しあった。K.マンにはマサリクの次のようなディレンマは他人事ではなかった。「彼は民衆を、デモクラシーを愛している。しかし、新しい『人民民主主義』は彼の理想ではなかった。」<sup>(33)</sup> 戦後成立した社会主義社会で自由が実現されていなかったからである。それゆえ、国家の中で社会主義に忠実であろうとすれば、彼が最も忠実でありたかった自由を犠牲にしなければならなかった。東西冷戦は国家レベルだけでなく、一つの胸の中にも存在したのである。その葛藤の唯一の解決が悲劇的解決であった。K.マンもこの年の6月に自殺を試みている。

最後の著作、そしてその内容ゆえに公開の遺書と呼ばれている『ヨーロッパ知識人の試練』（1949年）は彼の行き詰まりを如実に示している。戦後のヨーロッパは共通の敵を失って却ってさまざまな葛藤を生み出したかのようである。マルクス主義、教会、民族主義、自然科学信仰、技術、それぞれに対する反対。混乱の中での知識人の果たす役割。しかし、知識人たちもイデオロギーによって呪縛され、不毛の対立を繰り返している。日々に深まる亀裂。二つの反精神的超大国の間の闘争（アメリカのマネーとロシアの狂信）の中で、もはや知的な独立と統合のための空間は存在しないかのようである。それゆえ、希望を失った知識人は体制に働きかけるのではなく、絶望的な運動をはじめべきだろう。政治的経済的催眠術に目が眩んだ大衆の

良心に働きかけるには最後の手段しかない。自殺の波。それによって世界が直面している試練の深刻さを訴えるしかない。絶対的な絶望、可能性は人間的理性でなく非合理的なものによってのみもたらされるかもしれない。

ここでは、本来その人たちのために働きかけるべき大衆に対する不信がほの見えているようにも思われる。また非合理的瞬間が現れているようにも思われる。祖国との関係、冷戦下でのディレンマ、K.マンはもうかつてのようにのびのびと書けなかった。『火山』(1939年)で、故国を追われて苛酷な運命を生きた亡命者たちの群像を共感を込めて描いた時、彼にはまだ未来に対する希望があった。しかし、今や彼は自分の文体を掴むことができなかった。<sup>(34)</sup> それに、経済的な破綻、彼はもはや周囲の人々の援助なしには生活していけなかった。以前からの麻薬中毒。1948年5月、亡命の途についてから15年、カリフォルニアの滞在先で彼は突然自殺した。K.マンの弟、この頃新進の歴史家としての名声をあげつつあったゴーロ・マンは、自分に対する兄の焦りもほのめかしながら、自殺の原因として政治に対する悲嘆、金銭的な苦境、薬物の乱用をあげている。彼はまた、若いときからの死への傾斜も思い起している。<sup>(35)</sup>

国家の体制に反対し、故国を逃れて抵抗に身を投じた作家はもはや単なる芸術家ではありえない。K.マンは亡命以来、あるときは亡命仲間の救援活動に、あるときは亡命者間の政治的調停に奔走した。その途上でさまざまな人間に出会った。彼らの多くはさまざまな苦闘の中で心ならずも自らの命を断った。彼らに共感し、絶えず彼らを悼んでいたK.マンも、ナチス体制の打倒にもかかわらず、その後の分極化の中で、不本意な苦闘の果てに、彼らの仲間入りを選んだのである。彼の悲劇は亡命文学者の戦後におけるアイデンティティの喪失と共に、戦後文学の一つの断絶を示すものであった。ちなみに、彼の死の2日後にドイツ連邦共和国が、4ヵ月後にドイツ民主共和国が成立し、ドイツの分裂と世界の分裂が決定的となったのである。

## 註

- (1) ゴーロ・マン (上原一夫訳):『近代ドイツ史』2, 1977 327ページ。
- (2) 同様の言辞はフリードリヒ・マイネッケ (矢田俊隆訳):『ドイツの悲劇』, 1974 にも見える。同書174ページ。
- (3) Frank Thieß: Abschied von Thomas Mann. In: Deutsche Literatur im Exil, 1933-1945. Herausgegeben von Heinz Ludwig Arnold. 1974.
- (4) Arnold Bauer: Verbannte und verkannte Literatur. In: Deutsche Literatur im Exil, 1933-1945.
- (5) Alexander Abusch: Die Begegnung. In: Deutsche Literatur im Exil, 1933-1945.
- (6) Ralf Schnell: Literarische Innere Emigration, 1976. S. 3
- (7) ヤン・ベルク 他著 (山本尤 他訳):『ドイツ文学の社会史』下, 1989 P.953
- (8) Thomas Mann: Deutschland und die Deutschen. In: Gesammelte Werke, 11. S.1148 (青木順三訳)『ドイツとドイツ人』, 1990 P.37
- (9) 三島憲一:『戦後ドイツ』, 1991 P.26
- (10) ヤン・ベルク 他著 (山本尤 他訳):『ドイツ文学の社会史』下 P.945

- (11) ゴーロ・マン：上掲書 P.327
- (12) ペーター・ベンダー（永井清彦 他訳）：『ドイツの選択』, 1990 P.32  
永井清彦：『ヴァイツゼッカー演説の精神』, 1991 P.20
- (13) A&M・ミッチャーリヒ（林峻一郎 他訳）：『喪われた悲哀』, 1972 P.61
- (14) ラルフ・ジョルダーノ（永井清彦 他訳）：『第二の罪』, 1990 P.313～322
- (15) A&M・ミッチャーリヒ：上掲書 P.67～70
- (16) Thomas Mann: Deutschland und die Deutschen. In: Gesammelte Werke, 11. S.1147.  
（青木順三訳）『ドイツとドイツ人』 P.36
- (17) カール・ヤスパース（橋本文夫訳）：『責罪論』, 1965 P.113
- (18) アルフレート・グロセル（山本尤 他訳）：『ドイツ総決算』, 1981 では収容所へ送られたドイツ人の数を50万人以上と推定している。 同書 P.76
- (19) カール・ヤスパース（橋本文夫訳）：『責罪論』 P.114
- (20) ホルスト・ドゥーンケ（久仁郷繁訳）：『ドイツ共産党』下, 1974 P.643
- (21) アルフレート・グロセル（山本尤 他訳）『ドイツ総決算』 P.81
- (22) ヘルマン・ヴェーバー（星乃治彦 他訳）：『ドイツ民主共和国史』, 1991 P.30
- (23) Neue Rundschau, 1990, Heft 2. S.5～11
- (24) フリードリヒ・マイネッケ（矢田俊隆訳）：『ドイツの悲劇』 P.185
- (25) Klaus Mann: Der Wendepunkt. 1976, S.463
- (26) ibid. S.496
- (27) ibid. S.543
- (28) Klaus Mann: Vortrag nach dem Kriege. In: Heute und Morgen, 1969. S.285
- (29) Ube Naumann: Klaus Mann. 1984. S.125
- (30) Klaus Mann: Deutsche Stimmen. Ein Vorwort. In: Heute und Morgen, 1969. S.300
- (31) ibid.S. 318
- (32) Ube Naumann: Klaus Mann. 1984. S.131.
- (33) Klaus Mann: Die Tragödie Jan Masaryk. In: Heute und Morgen, 1969. S.299
- (34) Ube Naumann: Klaus Mann. 1984. S.129
- (35) Golo Mann: Erinnerungen an meinen Bruder Klaus. In: Klaus Mann: Briefe und Antworten. 1987. S.660